



映像で見ても、感じて、考えて、 つなぐ 戦争のこと

戦争を体験した方々の証言は、平和の尊さを次の世代へ伝える貴重な財産です。区では区民の皆さんの協力のもと、戦争体験者が、自らの言葉で語った戦争のことを映像に記録してきました。語りの一つひとつが、私たちに平和の尊さを優しく教えてくれます。本章では、平和の大切さをあらためて考えるきっかけとなることを願って、映像とともにその言葉をお届けします。





映像で見て、感じて、考えて、 つなぐ 戦争のこと



「画像」にタッチして、YouTubeへGO!



「名前・タイトル」にタッチして、
掲載ページへGO!



亀谷 敏子さん
東京大空襲体験講話

➔ P9



東城 茂男さん
体験したからわかる
戦争の怖さ

➔ P14



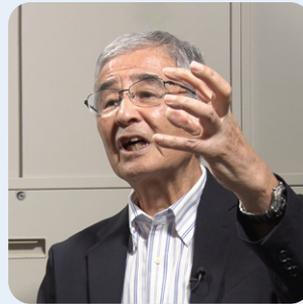
渡辺 芳子さん
戦争のない平和な日々が
続くことを願って

➔ P16



山本 誠さん
2度の空襲に遭遇して

➔ P17



宇田川 典文さん
私の戦争体験

➔ P18



近藤 伸一さん
今まで話せずにきた
戦争体験!

➔ P19



近藤 滋子さん
今まで話せずにきた
戦争体験!

➔ P22



植松 英子さん
東京の空を眺め、
会いたいと思った両親

➔ P24



井上 陽一さん
がくどうまかい
学童疎開と終戦直後の暮らし

➔ P25



五十嵐 政枝さん
戦争下にあった学生生活

➔ P27

▶ 東京大空襲体験講話



かめや としこ
亀谷 敏子さん
文京区向丘在住
終戦時：13歳

私は、昭和6年11月生まれで先日93歳になりました。もう80年前になりますが、13歳、国民学校高等科1年の時に東京大空襲に遭ったわけです。その時の体験を今日は話させていただきます。

私の家族は父と母と兄、それから姉、私の下に3人の妹と弟、全部で兄弟は7人でした。あの頃は「産めよ、増やせよ、子どもは宝だ」と言って子どもが5人以上の人は、東京府と言ったのですが府知事さんから表彰されました。子どもたちは宝だから死なせてはいけないと^{がくどうそかい}学童疎開が始まり、私より1つ下から田舎に^{えんこ}縁故のない子どもたちは、^{しゅうだんそかい}集団疎開で学校が一括して^{そかい}疎開させました。私の家は、茨城に父の実家があり^{そかい}疎開することになっていたので、^{しゅうだんそかい}集団疎開はしないで済んだのです。私はその時高等科1年生で、あの頃は大人並みに扱われました。

当時の学校

学校は工場になり、そこで軍需品を作らされ授業も何もなくなっていました。開戦記念日の12月8日、その時私は小学校4年生でした。「今日は重大放送があるから屋上に並べ」と言われ「本日、西太平洋において、米英と戦闘状態に入れり」というラジオの放送があったわけです。私たちは小さい頃や学校へ上がったからも軍国教育を受けて

きました。アメリカ・イギリスというのは「鬼畜だ、鬼畜生だ」と教わっていました。だから東南アジアを、みんな占領して植民地にしている悪い奴、それをやっつけるための日本は正義の戦争だということでした。私たちは胸おどらせる思いで、いよいよ日本は立ち上がったということで授業についたわけです。もう英語はけしからんということで、「ドレミファソラシド」も廃止されて、「ハニホヘトイロハ」になりました。何しろ「英語はみんな使っちゃいけない」という時代でした。ですから学校でも、授業より軍国教育の方が多くて、「兵隊さんに感謝して何かやりましょう」という風な、そんな感じの学校時代でした。

戦後の食事情

食べ物に関しては、戦時中私はそんなにひどい思いはしていないのです。

戦後、本当に餓死者がいっぱい出て、有名な裁判官の人が配給だけで生活できるかどうかと実験して、約3週間で餓死したことがニュースになったことがありました。戦後の方が本当にひどかったです。すいとも「アメリカの放出物資です。感謝していただきます」とそれが馬に食べさせるような、小麦粉を取った残りのふすまだけの物でした。さすがにそんな物は食べられなくて、その頃まずかったサツマイモなんか私20年ぐらい食べられなかったのです。もう本当にびしょびしょのまずいサツマイモ沖縄何号だとか、そういう物を食べていました。それでも、ふすま入りの小麦粉を混ぜて、それで焼いてやっと食べました。

すいとも本当に塩水か何か今みたいに出汁を取って美味しく、いろんな物を入れた物じゃなくて、塩水の中に浮かすような、そんなすいとんでした。さすがにまずくて食べられない感じでした。お腹だけが膨れ上がり本当に飢えていました。戦後は、疥癬だとかいろんなものができました。上野の地下道は浮浪児や復員してきた人たちが家を失くして、どこにも行き場がなく、みんな食べ物もなく、道がいっぱいでした。ですから異様な匂いがしていました。そういう時代でした。

3月10日の空襲

昭和20年3月10日、高等科1年生の時に初めて東京に夜間空襲がありました。寝て何時間かして母が、今日の空襲はひどいようだから、みんな起きて近くにあった末広味噌屋さんに避難しようと言いました。白河町で唯一のビルだったのです。コンクリートですから何かあったらそこへ逃げるようにと、避難場所にも指定されていました。私は今でも血圧が低く、夜中になると冴え冴えとして困るのですが、母にいくら起こされても、「寝ていたい、もう死んでもいいから寝ていたい」と言って、起き上がれなかったのです。そしたら母が「もうこの子はしょうがない」と言って、他のきょうだいみんなを起こして、避難所へ行くと行って出て行ったわけです。

空襲の中、父と一緒に

父はその時46歳でした。若い人がいなくて、町内の役員をやっていました。「今日の空襲はひどいようだから、味噌屋さんに避難するように」とメガホンをもって言ってまわったあと家に帰ってきました。私の家もみんな味噌屋さんへ行ったと思ったら、私がまだ寝ていたものから「馬鹿、何してるんだ、起きろ、表はもう火の海なんだぞ」と言われて叩き起こされました。それで父と一緒に遅ればせながら味噌屋さんへ行ったわけです。

味噌屋さんはもう1階まで避難町民で満員でした。今のラッシュアワーの電車じゃないですけど、ギチギチして入れなかったのです。けれど、消防団の人が、私たちは荷物がなかったものから何とかやっとなんか入れてくれました。もちろん地下室もいっぱいでした。私はその頃、食糧難ですから、13歳、といってもすごく小さく、大人の間挟まれて、何が起ってもわからない感じの子でした。後ろの方からすごい悲鳴が起きてきました。それで「お父さんどうしたの」と言ったら、「窓ガラスのガラスが溶けて、火が入ってきたみたいだ」と言うのです。ここにいたらみんな死んじゃうと、父が表のドアを開けようとした。けれど、消防団の人が「表も火の海だから、みんな死ぬから表へ行っちゃいけない」とドアを押さえました。しかし、父は「ここにいたんじゃ駄目だ」と言って強引に開けて「みんな表へ出ろ」と言い、出口近くの方は、みんな表に出たのです。私も表へ出た途端に、ものすごい火風に吹き飛ばされました。それで道端にゴロゴロと転がったわけです。父は真ん中辺まで這って行き、「こっちへ来なさい」と言いました。三つ目通り、13間道路と言われるコンクリートの道でした。その真ん中あたりに行き、そこから20mか30m先は隅田川からつながっている小名木川でした。父はそこへ飛び込むつもりでいたらしいのです。けれど向かい風で、小名木川の橋向こうからトタン板だとかいろんな物が火の粉と共に飛んできて行けませんでした。

飛んでくる火の粉を防ぎながら

飛んできたトタン板を父が持たせてくれて火の粉を防いでいました。しかし、もんぺに火がついたりして、最初のうちは父が手で一生懸命私の火を消してくれていたのですが、そのうちにそれもなくなくなったので、お父さん死んじゃったのかなって思いました。私ももうすぐ死ぬのかなって思いました。そうしたら、父が突然「こっちへ来い」と言って、

いきなり私の手を引っ張りました。向かい側に軍需工場があったのですが、その2mぐらいのコンクリートの塀の中へ私を投げ込みました。

そこでバサッと落ちた所がちょうど金のくずだとか、鉄のくずがいっぱいあって、そこへバサッと落ちたので怪我もなく、父もそこへ飛び込みました。塀の中、また、飛んできたトタン板の陰に2人でいたのですが、その塀がまた倒れてしまい下敷きになってしまいました。塀に穴を開けてもらい朝やっと出ることができました。そしたら、あの火の粉と煙で目がやられてしまい目が開けられないのです。何かにつまずく。目を一生懸命開けるとそれは死体だったのです。13間道路の幅で両側に燃える物がないような所ですから真っ黒焦げの死体じゃなくて、まだピンク色の、本当に何かやけどをした時に赤くなりますね、そういう死体がみんなゴロゴロと転がっていました。そんな死体につまずきながら、向かい側の私たちが避難した味噌屋さんを見ましたら、今の広島にある原爆ドームみたいに、コンクリートの骨組みだけになっていました。中は白骨になった人体が山になってボツボツと燃えていました。とても地下室などには行けませんでした。その後家の焼け跡へ行きました。

母、姉、妹、弟を探して

父がセメント会社に勤めていたものですから、我が家の防空壕はものすごくしっかりしていました。防空壕の上に約50cmのセメントを載せて作った防空壕です。家族の誰かが無事だったら、ここに戻って来るだろうからと交代で家族を探しに行きました。私は小学校とか、消防署とかコンクリートの建物に避難している方々の所を探しましたが、家族は見つからず帰ってきました。その日は防空壕に2人座って待っていたのですが、夕方になっても誰も帰ってきませんでした。

焼け野原の深川から渋谷、新宿へ

父と2人で、いつまでもここにいられないから

と、父のセメント会社へ行きました。もしかして焼け残っているかもしれないと言うので行きましたが、会社も、もう綺麗に燃えていました。それで清洲橋のふもとに浅野セメントの本社があり、そこへ行きました。事務所は綺麗に焼けていましたが工場は残っていました。今みたいにセメント袋がビニールではなくて、あの頃は麻袋だったので、その日は麻袋にくるまって父と2人で寝ました。翌日また家族を探しに焼け跡へ行行って、ずっと探したのですが会えませんでした。父の得た情報で深川の避難先は渋谷とのことで渋谷へ行くことになりました。日本橋まで歩けば、地下鉄で渋谷へ行けるからとの父の判断で日本橋まで歩きました。父の判断通り地下鉄は動いていました。3月10日の空襲で下町一帯は全部焼きつくさされましたが、東京も山の手は無事でした。渋谷に着き、地下鉄から地上に出た途端、当たり前な生活が当たり前前に営まれていることに新鮮な驚きを感じたことを覚えています。それから指定された国民学校へ行き、そこではじめておにぎりをいただきました。私は、本当に口もきけない魂が抜けた人間というか、そういう風になっていました。育ち盛りで、本当にお腹がすいていたと思うのですが、おにぎりをいただいても、それが美味しかったとか、まずかったとかの味も全然なく、もらったから食べるといった状態でした。それで父が「ここにいつまでいてもしょうがないから、ちょっと新宿へ行ってみてくる」と言って、母の兄一家が住んでいた新宿へ行きました。「お前はここで待っていなさい」というので、私は渋谷の小学校で待っていました。父は新宿から帰ってきて、「新宿も残っていたから新宿へ行こう」と言って新宿の伯父宅へ行きました。

そしたら、いとこたちが私のことを、ものすごく「臭い臭い」と言って、みんな敬遠したのです。1人の人が死んだって死臭が出るのに10万人の人が死んだのですから、その死臭と焼け跡の匂いが全部、体に染みついていたと思うのです。それ

で伯母が銭湯へ連れて行ってきて、全部洗ってくれました。ここで4日間お世話になりました。

毎日、家族を探して

その後も父は、家族を探して毎日深川ふかがわに通いました。14日の日に味噌屋さんの地下室の死体を出すと聞きました。それで父は、私が口もきけない女の子になっていたの、本当は私を連れて行きたくなかったらしいのです。けれど、やっぱり母たちが着ていた着物や何か自分じゃわからないからと、私を連れて伯父と一緒に3人で行きました。三つ目通りには、憲兵隊の車が3台ぐらい来ていて、地下室の死体がどんどん出されて並べられ、「10分間だけ死体の検閲を許す」と言われました。並べられた死体は首がなかったり、手がなかったりしていました。その中から母を探しました。そしたら、母のそばに赤ん坊だった弟がいました。母は髪の毛が全部なく丸坊主でした。一番下の弟は首から上がなくて、足首から下もなかったのです。胴体だけで見つかりました。それでも母のそばにいました。そのそばに5歳になった妹がおり、その妹は胴体だけしかなかったのです。それから10歳になった妹は、もんぺの柄でわかったのですが、腰から下しかなかったのです。というのは、あまりの暑さにきつと水道の水を、多分母が出したのだと思います。

他の人たちの死体はもうグズグズでしたけど、うちの母はわりかししっかりしていたのです。母は子どもたちにご飯をたっぷり食べさせたいと味噌屋さんに土、日だけアルバイトのお手伝いに行っていたのです。ですから地下室の水道がどこにあるかわかっていて、きつと水を出したのだと思います。水道の水が煮えくり返ってしまったのです。4日間、熱湯になり入れなかったそうです。ですから14日に死体を出した時は、やっと冷めたのだと思います。その煮えくり返って柔らかくなった死体を、今みたいに一体一体大事にする時代じゃありません。それで首がなくなったり、手

足がなくなったりしたのだと思います。

ですから、憲兵隊の人が10分間だけと言ったのは、多分手足や首などを出してもわからないだろうということで、着物でわかるように、そういうのだけを表に並べたのだと思います。その後、死体の処理を憲兵隊がやったのだと思います。そういうことで家族4人だけが見つかったわけです。姉とすぐ下の妹は、きつと熱くて母の元を離れて1階に上がり、白骨になってしまったのだと思いました。それから私は本当に失語症になりました。それで父に田舎に連れて行かれて、預けられましたけれど、もう本当に口もきけない女の子になっていました。

田舎の伯母は3人いた息子がみんな兵隊に行き、労働する人がいなかったものですから、私は学校なんか行かせてもらえず、畑仕事だとか家の中の仕事なんかにかき使われました。女中以下の生活をやらされました。それでも私は失語症になっていましたから、反抗もできず口もきけずに言われる通りにやっていました。一番つらかったのは、靴やなんかもみんな焼けてなかったの、裸足同様に霜柱が立っている麦踏みをやられたことでした。それが本当につらかったです。あの頃は3月といってもすごく冷たい雪の降るような、そういう時代でした。それでも反抗できないで伯母の言う通りに従っていました。

予科練よかれんに志願した兄

私には兄がおりまして一番上の兄です。3歳上でしたけど、中学2年生の時に予科練よかれんを受けたい人の応募が学校でありました。15歳以上になると少年予備学生・予科練よかれんと言って、そういうのを受けように学校で言われました。うちの兄はものすごいワンマンでしたけど、その兄が珍しく父と母に膝そろを揃えて、「どうか予科練よかれんに行かせてください」と言って頼んだのです。そしたら父や母が「あと5年待てば嫌でも徴兵ちようへいで兵隊に行けるのだから、それまで我慢しろ、絶対に行かせない」

と言って許可をしなかったのです。それで応募期間中だと思いますが、母が兄を部屋に閉じ込めて外出できないように見張っていたのです。そんな時に私を呼んで、「敏子、お前、^{よ かん}予科練の応募用紙を買ってきてくれ」と言ったので、文房具屋さんで買ってきて兄に渡しました。兄は所定用紙を書いて「これをポストに入れてくれ」と言ったので、私は父母の目を盗んで入れに行きました。心の中で父母のことを非国民とののしっていましたから、兄の言う通りその応募用紙をポストに入れてしまい、兄を^{よ かん}予科練に行かせたわけです。

ですから3月10日の時点では、兄はまだ奈良の^{かいこんこうくうたい}海軍航空隊にいたわけです。

兄との再会

それで3月31日に、今度は4月1日から^{かすみ が}「霞ヶ浦^{うらかいぐんこうくうたい}海軍航空隊」に転勤になるからと、特別休暇をもらい会いにきてくれたのです。私は「お兄ちゃんみんな死んじやったよ」と言ってしがみついて泣きました。その時初めて「お兄ちゃん」という言葉が発せられて、それから失語症が治ったのです。3月10日から3月の末まで約3週間、ほとんど口もきけない女の子になっていました。

2人家族に

しかし、その兄も3か月後の6月10日、^{つちうら}土浦の空襲で死んでしまいました。ですから私は7人兄弟がいた中で、結局1人になり父との2人暮らしになってしまったわけです。楽しい家庭も何もかもみんな奪い尽くすのが戦争です。

ですから私は、この世で戦争ほどの犯罪はない

と思っています。一晩で10万人もの、罪のない人が殺されるのが戦争です。38歳になったばかりの母の丸坊主になった姿や、妹たちの胴体だけになってしまった姿。腰から下しかなかった妹はタップダンスが大好きで、よく踊っていました。胴体だけになってしまった妹は、ままごと遊びが大好きで、お人形さんを抱いて1人でおとなしく遊ぶような子でした。

未来のある子どもたちが、みんな焼き殺されてしまう、本当に戦争ほどの犯罪はないと思います。



講演会の写真

すいとんの会（令和6年12月8日）

掲載内容は講演当時のものです。

▶ 体験したからわかる戦争の怖さ

空襲

昭和20年の5月25日の空襲は、昼間から警戒警報がありました。

新宿駅や今の高島屋の辺りは、貨物列車の線路がいっぱいあり、軍の兵器みたいなものを長野の方へ持っていくための列車に火がうつり、今の新宿四丁目の当時の旭町にも火がうつってきて新宿全土が焼けました。

私は四谷第五小学校の5年生で、山梨県の身延町に学童疎開していました。戦争が激しくなってきたので、祖母と弟が親戚の箱根に疎開していて、父が私を会わせたいとのことで、集団疎開の山梨から先生の承諾を得て、私を連れて東京へ戻り、箱根に行きました。それからうちの父が富山の生まれなので、最後に富山にも行こうとなり、ちょうど富山に行った時に、富山市が空襲に遭いました。離れていたが、一面田んぼのため、富山市の焼けた光景が間近に見えるような恐ろしさでした。東京へ帰ってきて、その1～2日後に空襲に遭いました。

父が少しでも過ごせるようにと防空壕を作り、私は、空襲に遭うたびに入っていました。その日に限って、どうもすぐに抜けるような空襲ではなく、しつこく回り、焼夷弾を落とされていて、防空壕で過ごしていても危ないからと、父が私と母親を新宿御苑へ行かせることにしたので、私は母に連れられ、2人で新宿御苑に逃げました。

今でも思い出すのは、爆薬がバーン、バーンと破裂するたびに、火の粉が真っ暗な新宿御苑の夜

とうじょう しげ お
東城 茂男さん
百人町三丁目在住
終戦時：11歳



空に飛び、こちらに覆いかぶさるような感じで、しばらくは夢に出てきました。そんな怖い思いもしました。

翌日、第一劇場の建物だけが残っていました。建物が残ったのではなく、コンクリートのため、その形で残ったのだと思います。後で聞きましたが、周りの人も火の海で逃げるところがなかったとたくさんの人たちの苦難を聞きました。

5月25日の空襲があって、うち辺りの一帯、全部26日に焼けました。その5月26日が私の誕生日のため、また一つ自分には残るものになっています。思い出したくはないものです。

空襲は本当に怖かったです。新宿御苑まで母親と一緒に行って、当時の新宿御苑は普段は入れませんが、空襲の時は、何力所も門を開けてくれていました。あれだけ広いため、どこが開いているかわかりませんでしたが、町内の人と一緒にいったため、入れたと思っています。私と母だけでは難しかったと思います。

今でいう新宿四丁目一帯、三丁目一帯が高円寺の手前まで焼けて、新宿西口から見渡す限り焼け野原でした。

寝るところもないので、高円寺に親戚がいたため、今じゃ考えられないですが、そこまで歩いていきました。その間に父が焼け跡にほったて小屋

を作ってくれて帰ってきました。

今でも新宿西口を見ると、全部焼け野原だったのが目に浮かびます。

学童疎開

私は、四谷第五小学校4年生の終わりに学童疎開をしました。この辺りの小学校は、山梨県身延山のお寺の宿坊や旅館に疎開して、田中屋、山本坊、窪之坊、覚林坊など6カ所くらいありました。私は、山本坊でした。

集団疎開でいうと、色々と思い出もありますが親元を離れており、当時はどこに行ってもそうでしたが、山梨はお米が取れず、さつまいもにご飯がふりかかっているようなものでした。やはり子どもたちは、育ち盛りのため、みんなお腹を空かせており、食べ物に関しては、あまりいい記憶はありません。ただ、大勢で一緒にいたというのはなかなかできないことですからそれはそれなりの思い出はあります。

私は、母親も、父親も空襲で亡くしてませんが、友達の中には、身延町に疎開していて、両親が東京で亡くなったということもあり、辛い思い出があります。

戦争を知らない子どもたちに、戦争はこんなに惨めだった悲惨だというのもイメージ的には必要だと思いますが、本当にそれを目の当たりにしないとわからないものだと思います。

普通の火事であるところに逃げればいいかわかりますが、空襲はどこに逃げればいいかわかりません。そういう状況の中の恐ろしさというのは、体験した者でないとわからないと思います。よく言うように、怖かったよと言っても、その怖さっていうのはやはり伝わらないと思います。

ただ、私が言いたいのは、当時は当たり前戦争があつて、まさか日本が負けるなんて、誰も子どもは思っていませんでした。新宿西口から見た光景は、本当にこれでいいのかな、こんなことあるのかと思いました。焼け野原で手の打ちようありませんでした。

夜は、電気が全くないため、真っ暗の中に焼けた炭の跡がホタルのように、遠くの方にちらちらと見えました。

子どもだからそれ以上の将来のことを考えませんでした。親にしてみれば本当にどうしたらいいかという気持ちだったと思います。

▶ 戦争のない平和な日々が続くことを願って

わたなべ よしこ
渡辺 芳子さん
終戦時：10歳



うしごめ くよこてらまち えんぶくじ
牛込区横寺町の圓福寺の四女として生まれた私
が、国民学校一年生の昭和16年12月8日、第二
次世界大戦が始まりました。当時は穏やかで何不
自由のない生活を送っていました。

戦争が激しくなった19年の4年生の夏、学童疎
開が始まり、私もお友達と栃木県下都賀郡赤津村
の龍興寺に疎開しました。蓮の花のきれいな立派
なお寺でした。担任の宇賀神テツ先生はとてもや
さしく、毎朝校庭で私の手を温めてくださいまし
た。お友達も小川での小物の洗濯を手伝ってくれ
ました。ただ家族と離れて暮らすことはとても淋
しく、手紙に「帰りたい」と書くことは禁止でし
た。ある日“北風に 声をかけてネ お母さん
疎開している 人を忘るな”と詠んで送りました。
すぐに父が迎えにきてくれ、私の3か月の学童疎
開は終わりました。

その足で母と3人の弟が待つ縁故疎開先の群馬
県の川俣へ向かいました。お寺の信者さんの紹介
の農家の離れでした。父と姉3人は東京でした。近
くに利根川が流れ、お友達と土手で遊び、おやつ
はいつも干し芋でした。放し飼いの鶏肉、雪の中
から顔を出した小松菜、畑でカマで割って食べたス
イカ、そのおいしさを今でも覚えています。ただお
手洗いは外、水は井戸からつるべで汲み、ご飯も

かまどで炊いたので母は大変だったと思いま
す。本も手に入らず、愛読書は唯一「小公子」
でした。20年頃より戦争もだんだん激しくな
り、3月10日夜東京方面の空が赤くなってい
た光景も見えました。

4月13日と5月25日は牛込地区も大空
襲に見舞われ、私の生家も4月に庫裏を含
む北側が5月に南側が焼失しました。たま
たま5月25日に帰京して大空襲に遭いま
した。幸い大谷石の塀は崩れず残っていたので、近
所の人たちと、母、姉、弟、私の4人で塀沿いに
ズラッと並び、うずくまって火災から身を守り
ました。焼夷弾の投下で矢来方向の木造の家が焼
け落ちる光景や家財道具を持って逃げまどう人
たちの姿が、今でも目に浮かびます。父が持っ
てきてくれた鉄カブトの水で目を洗ったりしまし
た。子どもだったせいか、このままどうにかなっ
てしまうのかという恐怖心はありませんでした。

8月15日疎開先の田んぼの畦道で終戦の報を
聞きました。まずホッとした気持ちが一番でした。
次にこの先どうなるのかと一抹の不安もありました。
焼けなかった家はよかったなあと思いました。趣
味で集めていた和紙の千代紙が焼けてしまったこ
とがとても残念でした。お陰様で家族は無事でし
たが、長年にわたって築きあげた物を失ってしまった
人たちの心は如何ばかりかと思われま。

私が生まれた時、祖母からいただいた桐の羽子
板を毎年お正月に飾っています。鉄筋コンクリ
ートでできた祖師堂の中で少々焼け焦げ、一部す
のついている羽子板です。

戦争のない平和な日々が続くことを願ってお
ります。

▶ 2度の空襲に遭遇して



やまもと まこと
山本 誠さん
下落合二丁目在住
終戦時：8歳

空襲は本当に凄^{すご}いもので、全部焼けてしまいました。一番衝撃的なのは、有名な3月の東京大空襲です。

その当時、私が住んでいたのは大田区^{おおたく}（当時は大森区^{おおもりく}）でした。父親が歯医者をやっていた関係もあり、自宅は木造の平屋だったのですが、3月10日の一回目の大空襲は防空壕^{ぼうくうごう}どころの騒ぎじゃなく、自分の家が焼かれるのを目の当たりにしました。

3兄弟で両親も健在、5人家族で過ごしていました。大空襲の時も5人で逃げたわけですが、その時の記憶で一番鮮明に残っているのは、空襲警報^{くうしゅうけい}、そしてB29の爆音です。今でも耳に残っています。B29は、極端に言うと操縦士が見えるんじゃないかと思うくらい、超低空でこちらに飛んできました。そこから焼夷弾^{しょういだん}が落ちていくのですが、焼夷弾^{しょういだん}というより、火の玉みたいなものが落ちてくるようでした。周りで何人も死んでいきました。当たって死んだ人もいるかもしれませんがショックで亡くなった人が随分いました。

そんな凄^{すご}い状態で、空襲を経験したわけですが、一番悲惨だったのがこの後でした。焼け出されて行くところがないため、新宿区^{しんじゅく}の市ヶ谷^{いちがや}にある祖父の家へ逃げることになりました。大田区^{おおたく}から歩いて市ヶ谷^{いちがや}へ向かいました。祖父の家^{いぢがや}に引っ越して、やれやれ落ち着いたかなと思った矢先のことです。

市ヶ谷^{いちがや}も空襲に見舞われ、祖父の家が焼け落ちてしまったのです。本当に全て焼けてしまいました。

焼けた直後というのは、独特の匂いが激しくしましたし、見たくない光景でした。だから「意識的に忘れたい」という時期もありましたし、あんまり鮮明に覚えてないというのも、そういった理由からかもしれません。

その後、父親^{ちち}のついでで栃木県^{とちぎけん}の烏山^{からすやま}に疎開^{そかい}することになりました。市ヶ谷^{いちがや}から烏山^{からすやま}に行く時に、リヤカーに荷物を積んで上野^{うえの}まで歩いていったのですが、周りを見ると、そういった疎開^{そかい}しようとする人々^{たたくさん}が沢山歩いていました。

一番感謝しなきゃいけないのは父親です。父は食料を買うために、東京と疎開先^{そかい}を行ったり来たりしていました。父が東京から列車で帰ってくる時、今では考えられませんが、機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}といって、列車に向かって戦闘機がシューって降りてきて機関銃でダダダダッと撃ってきたそうです。父は命がけで食料を買いに行ってくれていたのです。

疎開先^{そかい}の田舎生活で一番大きな出来事は、弟が亡くなったことです。私と3つ違いの弟がいたのですが、心臓弁膜症^{しんざうべんまくしょう}を患っていました。でも当時は与える薬がないのです。父親が東京まで出かけて行って、買い出しと同時に、薬や栄養になるようなものを買ってきて与えたのですが、やはりそれでも難^{すご}しく、弟は亡くなりました。それは凄^{すご}い印象として残っています。

私が小学校を卒業したのが昭和25年なのですが、その頃まではいろんな意味で生活は安定していませんでした。

▶ 私の戦争体験



宇田川 典文さん
上落合三丁目在住
終戦時：4歳

明治43（1910）年生まれの父は、私が生まれた昭和16（1941）年の5月に出征し、茨城の土浦に集められ、その後戦地へ送られました。黒い布で覆われた車窓から高田馬場の景色を見て覚悟を決めたようです。同年12月太平洋戦争が始まりました。

我が国の戦況が悪くなった頃からB29が現れるようになり、戸山ヶ原の高射砲陣地よりポンポンと飛行機の後を追うように煙があがったのを覚えています。夜の空襲警報が頻繁になり、電気を消した暗がり防空頭巾を被った私は母にすがって照明弾が明るく落ちていくのを怯えて見ていました。

昭和20（1945）年3月、下町を襲った東京大空襲がありました。東の空が赤黒く染まり恐怖に怯えました。5月25日夜、けたたましく警戒警報が鳴り、ゴーという爆音とともに焼夷弾をまき散らしながらB29の群れが早稲田から小滝橋へ迫って来ました。焼夷弾は六角形で油がいっぱい詰まり木造の家はひとつたりもありません。

母は私と姉を伴い、美仲橋を渡り、中井御霊神社の下にある大防空壕を目指しましたが、上落合は火の手が回り逃げ切れず、六の坂下の暗渠に潜り込んだそうです。現在の林芙美子邸から五の坂、六の坂にかけて（中井通り沿いに）、当時、幅1メートル、深さ1メートルほどの深い暗渠が通っていた

ました。熱風渦巻く中、暗渠で夜を明かしました。防空壕に向かった方も途中で被災したと後日聞き、運が良かったと母は思ったそうです。一夜明け、まだ熱気が残る美仲橋を渡った時、川の南側に広がる麦畑の下肥にまじった紙が列をなして火が燻っていました。

上落合の私の家も隣家も全焼。物置の練炭が真っ赤に燃えていて、台所のタイルの流しが白く残り、鉛管むき出しの水道から少し水が出ていました。今、テレビ等で見る戦争は瓦礫の山ですが、日本は木造家屋なため、焼け焦げた木と、少しの電柱が残るだけで全て焼き尽くした焦土でした。

私たちは母の実家の荻窪に寄宿し父の帰りを待ちました。父はスマトラ島パレンバンで終戦を迎え帰ってきました。父の顔を知らずに育った私はしばらく懐かなかったようです。

細い柱に焼けたトタンを集め、屋根は木のチップを貼った「とんとん葺き」で覆い、窓は短冊状のガラスを紙で貼り合わせた粗末な家からの出発でした。

当時の私の戦争体験と後日、母が話してくれたことをまとめたものです。

近くの最勝寺にある戦災で亡くなった無縁仏の墓に合掌。

▶ 今まで話せずにきた戦争体験!

私は昭和5年、新潟県小千谷市の米農家に生まれました。来月で95歳になります。7人兄弟の2番目で長男です。弟や妹の世話、農作業、養蚕など、小さい頃から何でもやりました。こう見てもケンカは強く、近所で評判のガキ大将でした。そんな田舎のガキ大将が、なぜ、特攻隊員としてわずか15歳で死ぬ覚悟をしたか、私の青春時代の苦しい1ページをお話しさせていただきます。



新潟県
小千谷市の生家



叔父と一緒に

尋常高等小学校、現在の中学校の卒業が近づいてきた頃、私は進路に悩んでいました。選択肢は3つ。旧制中学校に進学するか、奉公などに出て働くか、軍隊に志願するか。私は、とにかく親孝行をしたと考えていました。



昭和5年生まれ
7人兄弟の
2番目（長男）

近藤 伸一さん
大久保三丁目在住
終戦時：15歳



昭和16年から第二次世界大戦が始まり、日本は、政治、経済、教育すべてが軍国主義の中、世間は「息子が戦地に行くことが家の誇り、親孝行」という風潮でした。私は、信頼していた学校の先生に相談をしました。先生は、軍隊に志願することを勧めたうえで、こう言いました。「近藤は、千葉県ならしの習志野にある陸軍の戦車学校に行った方がいい。海軍の予科練に合格するのは難しいから」と。予科練とは、戦闘機のパイロットの養成学校のことです。そして、海軍の予科練に入るということは、特攻隊員になるということです。その先生の言葉は私の負けん気に火を付けました。「なんだと！そこまで言うなら、海軍に合格してやる。憧れの海軍の7つボタンをつけてやる」、私は合格のため、勉強に励み体を鍛えました。この受験は、両親には黙っていました。報告すれば、反対されるとわかっていただけです。結果、新潟県で数人の受験者のうち、合格したのは私一人だけでした。



予科練の第一次試験を終えて
(写真中央)

昭和19年5月、ついに召集令状が届き、両親はいわゆる赤紙を見て、初めて、私が予科練を受験し、特攻隊に合格したことを知ったのです。両親は、出征に賛成とも反対ともいっていませんでした。いや、言えなかったのです。赤紙が来てしまった以上、出征を拒めば国賊です。村では初めての特攻隊員の誕生に、沸いていました。



召集令状が届き、出発を目前にして



昭和19年6月10日、出征の日。村長・校長をはじめ、多くの人々が見送りに集まってくれました。私は声を張り上げ叫びました。「大勢の方々にお集まりいただき、御礼申し上げます！」「私は本日より、一旦入団の暁には、二度と再びこの土を踏まない覚悟であります！」盛大な拍手と万歳三唱が響く中、振り返ると、小さな妹を抱いた母が、呆然と立ち尽くしていました。それでも母は、私の手を取り、泣きながら「伸一、達者でな」と、その手を握りしめたまま離しません。私は胸が張り裂けそうで、声を発することができませんでした。母のその手の感触は、今も忘れることはありません。



入隊後「7つボタン」の制服を着て

軍隊での訓練は、大変厳しいものでした。特別攻撃隊、略して特攻隊とは、決死の任務を行う部隊、つまり体当たりで相手の船に突撃していく。特攻隊員一人一人が、爆弾なの

です。命を惜しんだら特攻隊ではない。特攻隊として、国のために死ぬことが、親孝行なのだと思えるようになりました。



上官たち



奈良県若草山にて引率外出

昭和20年8月、普通は3、4年の訓練がなされるところ、戦況が逼迫していたため、わずか1年の訓練で出撃することになりました。激戦の地・沖縄に向かうべく、京都の舞鶴で待機。先に出発する先輩たちは、出撃前夜、酒を浴びるように飲んだり、恋人や家族に手紙を書いていたのか、皆、虚ろな目をしていたのが印象的でした。昭和20年8月13日、自分の最後の姿を写真に撮り、形見としての爪、髪の毛が集められ、両親へ遺書を書きました。私は満15歳、日本のために命を捨てる覚悟を決めました。

8月14日当日。沖縄に向かうはずの輸送船が、舞鶴の港に姿を見せません。「一体どうしたんだ?」「何があったのか?」、不安と混乱の中で日

付が変わり、8月15日を迎えました。広場に何千人もの兵士が集められた中、天皇の玉音放送ぎよくおんほうそうが流れました。よく聞こえず、放送の内容は全く理解できませんでした。「亡くなった戦友たちは使命を果たしたのに、自分は生き残ったことが悔しい」と語る先輩たち。その時の複雑な心境は言葉にできません。後からわかったことです、私が乗るはずだった輸送船は、途中、爆撃され沈没してしまったそうです。



昭和20年（奈良）
班全員で「最後の姿として」集合写真を撮影

その年の10月、両親の待つ新潟へ。村には、私と知り合いの2人が戦地から戻ってきました。私は生きて帰り、その知り合いは、小さな骨壺こつぼになって帰ってきたのです。「二度と再びこの土を踏まない覚悟である！」と叫び出発。自分は人間ではない、特攻隊とっこうたいとして、国のために命を捨てると決意したのに、使命を果たせず無事に帰ってきた自分。両親は安堵あんどした様子でしたが、混乱する私を持って余していたように感じました。

自分は何のために生きているのか、生きる意味

を見失い、故郷に居場所もありません。一年、二年と過ぎ、苦しみは一層深まるばかりでした。私の苦しむ姿を見かねた友人が、「1回東京へ行ってみないか」と誘ってくれました。東京では、皆、苦しい中でも懸命にもがき、前向きに生きようとしている人々の姿がありました。私は心を揺さぶられ、そこに希望を見だし、もう一度生きてみようと思えることができました。とにかく、真面目に誠実に何事にも取り組み、今までの自分を取り戻すかのように、ガムシャラに生きてきました。多くの友人、大切な家族に出会い、15歳で死ぬはずだった私が、今、95歳になろうとしています。

私たち昭和初期の時代と、令和の時代は全く違います。私は「昔はこうだった、だから、ああしろ、こうしろ」と言うつもりは全くありません。私はこういう生き方をしてきたという事実を伝え、若い皆さんが、これからの参考にさせていただければと思っています。

そして、少しでも皆さんの役に立つのであれば、命ある限り自分の体験を語っていこうと決意しています。

私は6年前に脳梗塞になり、後遺症で言葉がほとんど話せなくなりました。数年かかりましたが、今日こうして皆さんの前で発表できるまでになりました。聞き取りづらい部分もあったと思います。最後まで聞いていただき、本当にありがとうございました。

私もまだまだがんばります。

平和講演会・映画会（令和7年3月16日）

掲載内容は講演当時のものです。

▶ 今まで話せずにきた戦争体験!

昭和6年、埼玉県大宮おおみやに生まれ、昭和35年、結婚を機に、新宿しんじゅくに越して参りました。今日は、大宮おおみやでの戦争体験をお話しさせていただきます。今では、新都心として発展していく、大宮おおみやの地にも戦争の爪痕が、そして、私の心にも深い傷痕が残っています。

私の青春時代は、なぎなた、竹槍たけやり、草刈りなど、軍事訓練の記憶で塗りつぶされています。学校の校庭は畑となり、積み上げた枯れ草に、汲み取った人糞じんぶんを手ですくい、混ぜては四角い黒い肥やしの山をいくつも作られたものです。毎月1日と15日には、必勝のハチマキをした、女子学生で隊列を組み、神社で、日本は神の国だから必ず勝つと、「撃ちてし止まん」はっこういちう「八紘一宇」と皆で声を張り上げて叫びました。「撃ちてし止まん」とは、戦意高揚のために用いられたスローガンの一つで、敵を打ち負かすまで戦いを止めない、という意味になります。「八紘一宇」は、本来は平和を願う言葉でしたが、第二次世界大戦中の、日本の中国・東南アジアへの侵略を、正当化するスローガンとして、利用された言葉です。すべて「お国が勝つまでは」の合言葉で、贅沢ぜいたくは敵とされ、日常生活の細部に至るまでも、ガマンガマンの世の中でした。

軍人が一番偉いと言われ、道端で、若い兵隊さんの敬礼が、少し遅れたというだけで、上官は激怒し往復ビンタを。倒れこんだ兵隊さんを誰も助けることができませんでした。また、「大陸の花嫁さん」ともてはやされ、満州開拓団まんしゅうかいたくだんの慰問袋いもんぶくろで文通し、それに応募した友達の姉は、満州に渡ったのち音信不通となりました。友達のお母さんの泣

こんどう しげこ
近藤 滋子さん
大久保三丁目在住
終戦時：13歳



き崩れていた姿が、目に焼き付いて離れませんでした。

昭和20年3月の東京大空襲、毎日、東京方面の空は赤く焦げたようでした。東京からの電車を降りてきた人々は、裸足の足が焼けただけ、引きずりながら歩いている人、手拭いで火傷やけどした顔を隠している人。皆、目に光はなく虚ろうつろに歩く、地獄の使者のような姿を目の当たりにし、私たちも、これからどうなってしまうのかと恐怖の日々でした。

そしてついに4月、大宮おおみやにもB29が襲来おおもや、大宮駅の、列車の車両基地を目標に、爆撃が開始されました。駅前の一角に住んでいた私たち家族は、その流れてきた焼夷弾しょういだんの爆発により、炎の中に。必死で逃げた、防空壕ぼうくうごうの中から見ただけ、焼夷弾が次から次へと、花火のように散り、瞬間、火の海になっていく様子でした。赤く波のように押し寄せてくる炎。防火用貯水槽からの、バケツリレーの消火訓練は、何の役にも立ちませんでした。病弱でもあった私は、何もできずただ茫然ぼうぜんと立ち尽くしていました。「命が助かった、よかったよかった」という両親の声に、ハッと我に返りました。振り返ると、我が家は、屋根も柱も真っ黒に焼け落ちていました。その中で、使えそうな畳を何枚も積み重ね、雨風を避けながら家族4人で、肩を寄せ合い暮らすことになりました。

8月15日、終戦。戦争が終わった、日本が負けたということがわかったのは、何時間も後のことでした。事業家の父が、「満州の株は紙くずになっただなあ」と呟いた厳しい横顔に、これからの苦しい生活を暗示されたようでした。すべてが配給制度の中で、サツマイモのツルが一番のご馳走だった記憶、物々交換でやっと手に入れたお米のおにぎりの味。ある裁判官が配給制度を守り、餓死したというニュースにショックを受けました。敗戦国日本の、空虚な日々の中でも、私たち庶民は必死に生きてきました。

私は、人の人生を翻弄し、悲惨な目に遭わせた戦争が嫌いです。戦争は人を不幸にしまいませす。戦争は、絶対に起こしてはいけません。では、戦争を起こさないためにはどうすれば良い

か？それは、私たち戦争体験者が、体験を語っていく、戦争の悲劇を伝えていかななくてはなりません。そして、私たち女性の声、母たちの連帯だと思います。女性はおしゃべりが得意です。家族、お友達、地域、皆と仲良くして草の根から平和を作っていきます。そして、日本に、世界にも広げていきましょう。

縁あって、特攻隊志願だった夫と新宿区に64年、共に90代半ばを元気に迎えられたことに感謝して、1日1日を大切に生きていこうと、心に決めた戦後80年です。これからも頑張ります。今日は聞いていただき、どうもありがとうございました。

平和講演会・映画会（令和7年3月16日）

掲載内容は講演当時のものです。

▶ 東京の空を眺め、会いたいと思った両親



うえまつ えいこ
植松 英子さん
下落合四丁目在住
終戦時：12歳

私の通う小学校の姉妹校が静岡にあったので、小学校4年生から6年生は、みんなでそちらへ集団疎開しました。私は当時6年生でした。

疎開先の寄宿舎は大きくないので、教室を寢床にしていました。数か月間そこで暮らしましたが、勉強なんて大したことはできなかったですし、家に帰りたいたい一心でした。みんなで東京の方を眺め、両親のことを思いながら泣いたこともありました。

昭和20年3月、6年生だけが女学校に進学するために東京に帰されました。東京に帰ったちょうどその晩、大空襲に遭い、四ツ谷駅近くの私の学校はコロッと焼けてしまったのです。卒業式もできないままでした。

終戦を知らせる天皇陛下のお話は、家族も周りの住民も集まって聞いていました。涙をこぼす母

たちのそばで、私はまだ子どもだったので、ただただ黙って聞いていました。戦後は思わぬことがどんどん起きるので、子ども心についていくのが精一杯でした。本気になって自分の先の人生を考えるとということもなく、流されていくような感じでした。戦争に負けて悔しいとは思わなかったです。「戦争が終わってうれしいな。もうB29の嫌な音を聞かなくてすむんだな」という気持ちが大きかったですね。当時は目先のことで精一杯で、社会に対して色々考えるということはできなかったです。今の子どもたちは世界に目を向けている感じがして、すごいなと思います。

最近の情勢を見ても、戦争って何でしているのかしら、と腹立たしい気持ちです。戦争中、B29が飛ぶのを見て、憎らしいという感情とも違う、何とも言えない嫌な気持ちになりました。それが、今もどこかの国で起きていると思うとどうしようかと思えます。

だから本当に、戦争のない世の中にしたいものですね。

がくどう そ かい 学童疎開と終戦直後の暮らし

敗戦（終戦）から80年、昭和9年生まれの私にとっては、やはり学童疎開と戦後の暮らしが忘れられない。

がくどう そ かい 学童疎開

昭和19年、次第に激しくなる米国空軍の空襲から小国民を守るとの政府と軍の方針で安全な地方に親戚のない者は学校単位での疎開（集団疎開ともいわれた）が行われた。



姉への手紙

当時小石川区（現文京区）竹早小学校に通学の私たちは浅草区（現台東区）の児童と共に宮城県なるこちよう鳴子町に行った。初夏の或る日、夜行列車に僅かな学用品と、衣類を背負い友人たちと遠足気分で乗り込んだ。陸羽東線鳴子駅に着いたのは翌日昼ごろ、駅頭は大歓迎の町民でいっぱいだったが温泉町特有の硫黄の匂いにびっくりしたのが忘れ難い。

疎開の第一陣は5、6年生で、私は当時5年生、その後には下級生も加わってきた。疎開先での暮

いのうえ よういち
井上 陽一さん
北新宿四丁目在住
終戦時：11歳



らしは当初は友人たちと旅行気分楽しく過ごしていたが3、4日すると両親や家族が恋しくなり、就寝時に布団の中で周囲に聞こえぬように泣く子が増えた。

それでも翌朝は一斉に起床、東京に向かって挨拶の後、「疎開は勝つ為国の為〜」と歌って一日をスタートしていた。午前中は宿泊旅館の大広間で長机を並べて授業、午後は畑仕事、時には戦闘機用に使う油を取るとかで松の根（松根油）を掘る作業があったが、非常にキツイものだった。食事はコメどころの宮城県ながら質量ともに不十分で、東北地方特有の“わらび”が味噌汁、煮物、漬物に出てくるのには閉口したが、秋には栗拾い、冬にはスキーと東京では経験できないことを楽しむこともできた。



終戦後の疎開先での日記

ほぼ1年が過ぎた8月15日の朝、町中にラジオ放送が流れ鳴子小学校校庭への集合が命じられた。正午に始まった玉音放送は電波状態が悪く聞き取りにくかったが、前列に並ぶ先生たちが一斉に泣き崩れ“敗戦”を知ることとなった。宿舎に帰る山道には早い秋の訪れを知らせるようにコスモスが咲き乱れ、空には赤とんぼが人の世を嘯うように飛んでいた。玉音放送の後、少し落ち着き始めてから、先生の提案で東京に帰った時の土産として友人たちと山で“イタドリ”の葉を取ってきて乾燥させ細かく刻み、先生から貰った辞書を切りタバコの長さに合わせた紙と鉛筆を巻き付けたもので紙巻きたばこを作り、持ち帰ったところ父親に大喜びされたのを覚えている。



疎開先の鳴子から帰る竹早国民学校の子どもたち

終戦後の暮らし

疎開が終わり東京に戻ったものの、我が家は戦災で失っていて一家は品川の親戚宅に同居していた。私は小学校卒業までの約5か月、近くの品川小学校に通うこともできたが友人との別れが辛く、戦災で校舎を失い学校全体が間借りしていた茗荷谷の窪町小学校まで通うことになったが、北馬場～品川～大塚～市電茗荷谷の通学で初め

て敗戦の厳しさを味わうことになった。どの電車も窓ガラスが無く、そこから乗り降りす



竹早国民学校通信表



卒業写真。竹早国民学校が焼失、窪町国民学校を借りて

るのが当たり前、ダイアグラムは全く無い状態で体の小さかった私にとっては厳しく、辛い日々だった。

また、我が家は小石川の家が強制疎開にあったのちに父親が勤務していた新子安（横浜市）の社宅が5月の空襲で焼失しており、非常に苦しい状態だったが、母親が僅かな着物を実家（千葉県田市）に持ち込みメリケン粉に換えて饅頭を作り北馬場駅（現新馬場駅）前で売り、売り上げでまた粉を買って、饅頭売りを繰り返していた。

また、近所の工場跡地に“あかぎ”の群生を見つけ、近所の人たちで夜中に出かけ、茹でて食したりもした。そんな暮らしが続いた昭和24年、東京都の戦後初の集合住宅として建築された戸山アパートの抽選に当たる幸運に恵まれ、新宿での生活が始まった。

書き連ねたことは多くの方々が似たような経験がされていたはずで、肉親の一人も失わずに済んだ幸運に感謝すべきかもしれない。



家族から疎開先へ送られた手紙

▶ 戦争下にあった学生生活



いがらし まさえ
五十嵐 政枝さん
中落合二丁目在住
終戦時：19歳

私は地元の茨城県で女学校に通っていました。戦争の前は女学校3、4年生のころでしたが、満州事変、そして支那事変が起きて、ついに私も挺身隊に連れ出されました。私の通う女学校の生徒は、群馬県の中島飛行場へ学徒動員で召集されました。行かなければ卒業証書を得られないので、否応なく行きました。大変でしたが、そういう苦労をしていると、学校のお友達や中島飛行場への学徒動員で知り合った人との仲は深まりました。大人になっても当時のお友達と会うと、その当時の苦労を思い出しました。

群馬県での暮らしは、みんな寮生活でしたから、地方のおばあさんたちは「お嬢さんたち、可哀そ

うね。若いのに」と差し入れをくれました。思い起こすと、本当に良い人ばかりでした。

疎開せずに残っていた家族は茨城にいましたが、叔父が東京にいたので、父は東京と茨城を行き来していました。東京大空襲の時、父が茨城から見た東京の空は真っ赤だったそうです。父は東京へ向かおうとしましたが、道路が死体で埋め尽くされて渡れないので戻ったそうです。戦争は本当に嫌ですね。

今の子どもたちへ向けて

私の学生生活はなにしろ戦争下では物資はないですし、質素なものでした。女学校では体育の時間は薙刀の練習をさせられました。勉強だけはいつの世も大事だと思います。勉強をしっかりしておけば、どんな時代でも乗り越えられるのではないのでしょうか。